

(メッセ海外通信 2009年4→6月号掲載記事)

～釜山日本人会の社会活動について～

下関市総合政策部国際課
(釜山広域市派遣職員)
藤川 雅宏

第二次世界大戦前に韓国人男性と結婚後、韓国に渡り定住した日系婦人が当時2500名前後いたと言われていています。その後、朝鮮戦争で夫、家族と死別するなど辛く貧しい生活を送る中、互いに励まし合うために日系婦人が一人、二人と集まり、やがて親睦と相互扶助のための会が各地に出来、芙蓉会となりました。結成当初2000人程度いたとされる会員も日韓国交正常化(昭和40年)後に帰国、あるいは亡くなるなど、現在、芙蓉会釜山本部の会員は約100名となりました。

厳しい環境の中ではありましたが、芙蓉会会員達も若いときは、韓国社会に貢献しようと養老院への慰問、水害発生時の見舞い活動、あるいはベトナム戦線へ行く兵士の慰問等数々のボランティア活動を行っていました。現在では、釜山市立公園墓地内にある日本人慰霊碑の清掃、管理及び慰霊祭等を行っています。

しかし、現在、会員の平均年齢も90歳前後となり、高齢や持病等で働くこともできず、援助を受けなければ生活できない方が、釜山、大邱、馬山及び浦項に合計21名いらっしゃいます。(以上、釜山日本人会作成資料「芙蓉会について」より一部抜粋、編集)

今年の桜の季節に釜山日本人会^(※)(会長：大道英隆)が実施した「芙蓉会釜山本部の会員の方々の日本里帰り事業」で同本部の御婦人7名が下関を訪問されました。当事業は、「最後に故国日本を見たい」との御婦人達の夢を叶えるため、釜山日本人会が事業主体となり、同会会員(法人、個人等)及び賛同者の善意金によって今回初めて実施されたものです。

下関市(国際課)は、御婦人達にゆっくりと滞在していただくため、交流会等の行事は差し控え、職員及び医療ボランティアによる人的サポート等を通じて、日本里帰りをお手伝いいたしました。

御滞在中は、関門海峡や角島(つのしま)の風景、城下町長府、庭園の桜や菜の花などを楽しまれ、市内の温泉で静養されました。7名中で唯一下関と所縁のある御婦人は、女学校卒業後初めての帰郷となり、時折涙を流されました。母校(長府高等女学校：現在の県立長府高校)も訪ねられ、感慨も一入のようでした。

御婦人達の帰国の夢を実現出来たことは無論のこと、釜山日本人会の会員や賛同者の方々が善意の気持ちで一つになれたことにも重要な意義があり、本当に心温まる事業であったと振り返って感じています。今回、読者の皆様に芙蓉会のことや韓国における日本人コミュニティの社会的責任に基づいた取り組みといった社会的側面について知っていただきたく、釜山日本人会の社会活動事例を紹介させていただきました。

- (※) 釜山日本人会は、日韓両国の経済関係の円滑な発展と両国の親善に寄与することを目的として1972年10月に設立され、釜山を本部に馬山、浦項、亀尾・大邱の3支部のほか、釜山日本人学校を運営しています。